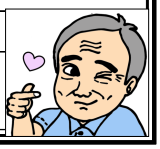
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：イメージ　何を表現してるのか

俳句の可能性・俳句を味わう 教P62～68

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



俳句の可能性

宇多 喜代子

どの子にも涼しく風の吹く日かな　　飯田龍太

この句には、「どの子」とは誰なのか、風の吹いている場所はどこなのか、現在のことなのか、過去のことなのか、時間は午前なのか午後なのか、そのような説明が何も書かれていない。わかっているのは、季節が夏であること、子供が複数いること、その子たちに涼しい風が分け隔てなく吹いているということだけである。

俳句が散文や報道記事などと違うのは、省略されている部分を、読む人の自由な解釈で補って鑑賞できるというところである。この句を読んで、「どの子にも」とは自分のことだ、と思う人もあるだろうし、校庭の木陰でクラスメイトとくつろいでいるときのことだと思う人もあるだろう。幼児の頃、海辺で遊んだ体験を思い出す人もあるだろう。

そんな想像をかきたてる個々別々の言葉を一つにつないでいるのが、五・七・五という「定型」と、「涼し」という夏を表す言葉、すなわち「季語」である。詳しい説明を省略する俳句には、一句の柱となる言葉に「季語」を用い、それを五・七・五という「定型」で表現するという基本的な約束がある。この約束を「有季定型」といい、俳句という韻文を支える大きな力となっている。「涼し」が夏の季語であることを知るには「歳時記」を繰ればよい。

いくたびも雪の深さを尋ねけり　　正岡子規

雪が激しく降っている。重い病気で寝ている子規が、僅かに見える障子の穴からその様子を見ている。どのくらい積もったのか、確かめることができない子規は、病室を出入りする人に、積雪の様子を幾度も尋ねる。今、くるぶしくらいまで積もったよ、とか、膝が埋まるくらいになったよ、などと聞き、庭や道路や公園に積もった雪景色を想像する。

降る雪のことを詳しく説明したくても、「定型」という制約の中では全部言い尽くせない。そこを補うために工夫された方法の一つに「切れ字」がある。例えば、冒頭の句で、これ以上は言えないという断念を表しているのが、最後の「かな」であり、子規の句の「けり」である。

次に、「切れ字」を用いずに一句を完成させた俳句を紹介しよう。

跳箱の突き手一瞬冬が来る　　友岡子郷

初冬の体育館で体育の跳び箱練習をしている瞬間を、カメラに捉えたと思えばいい。跳び箱に手を突いて空中に飛び上がった。その一瞬、宙で触れた澄んだ大気に、「冬だ。」と感じたのだ。「跳箱の突き手一瞬」と「冬が来る」ことは無関係だが、作者の感性は、この二つを一つにすることで、初冬のきりっとした季節感を出すことに成功している。

「一瞬」を「冬」という長い時間につなぐことができるように、短い字数でいろいろなことが表現できるところに、俳句の可能性が秘められている。

たんぽぽのぽぽと絮毛（わたげ）のたちにけり　　加藤楸邨

この句を声に出してみるといい。「ぽぽ」というときの唇の丸い形と声の響きが、たんぽぽの丸い絮毛の軽やかな様子をよく表していることに気づくだろう。声に出して読むことで言葉が生き生きしてくるのも、韻文の特徴の一つである。その特徴をさらに生かしたのが次の句だ。

分け入つても分け入つても青い山　　種田山頭火

放浪の俳人とよばれた山頭火は、一人で全国を行脚する旅に出た。繰り返した言葉のリズムが、山道をひたすら進む歩調に重なり、読者を共に歩いているかのような調子に誘い込む。

この句は五・七・五の定型をはみ出しており、季語もない。このような自由な音律の俳句を「自由律俳句」とよび、季語のない俳句を「無季俳句」とよんでいる。

約束が多くて、俳句は難しいと思われるかもしれないが、ここに取り上げた俳句には特別なものは一つも出てこない。涼しい風、雪、跳び箱、たんぽぽ、歩くことなど、私たちの身近なものばかりだ。関心をもてば、教室の窓から見える雲も、風に揺れる草木も、道端の小石も虫も、友達や家族も、みな俳句の主役になってくれる。

俳句を作るとき、うまく作ろうと思わなくても、目を留めたものに「こんにちは。」という挨拶の気持ちが伝われば、その気持ちはおのずと俳句となる。気に入った風景をカメラで撮るような気軽な感覚で自由に俳句を作ってほしい。できあがった俳句は、その瞬間の気持ちを鮮やかに映し出した、作者だけの大切な記録となるだろう。

俳句の決まり事・修辞法

◎有希・定型
有希　季語を用いる
定型　五・七・五

○切れ字 … 意味の切れ目（句切れ）に置く語のこと。
「や」「かな」「けり」など
主に強調・詠嘆（感動）を生み出す。語調を整える役割もある。〔使わなければならないものではない〕

○よく使われる表現技法
・体言止め＝句末を体言（名詞）で締め、余韻・余情を残す。
・比喩法＝たとえ
〔擬人法＝人でないものを人であるかのようにたとえる〕
・倒置法＝語句の順序を入れかえて、印象を強める。

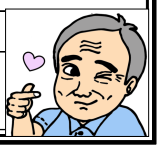
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：イメージ　何を表現してるのか

俳句の可能性・俳句を味わう 教P62～68

＿＿年＿＿組＿＿番

氏名



どの子にも涼しく風の吹く日かな　飯田龍太
季語（涼し〔く〕）季節（夏）　切れ字＝かな
わけへだてない平等・安心感。居心地の良さ

いくたびも雪の深さを尋ねけり　正岡子規
季語（雪）季節（冬）　切れ字＝けり
雪の積もり具合に対する期待感と自身の体調との対比

跳箱の突き手一瞬冬が来る　友岡子郷
季語（冬）季節（冬）
跳箱に挑む緊張感（張りつめた空気）と呼応する冬の到来　引き締まった

たんぽぽのぽぽと絮毛（わたげ）のたちにけり　加藤楸邨
季語（たんぽぽ）季節（春）　切れ字＝けり
「ぽぽ」という響きのかろやかさとかわいらしさ

分け入っても分け入っても青い山　種田山頭火
季語（無し）季節（無し）　無季・自由律俳句　反復法・体言止め
どこまでも続く限りなさ＝善し悪しは自身の現状次第

バスを待ち大路の春をうたがはず　石田波郷
季語（春）季節（春）
新鮮さ・期待・不安が入り交じった
新年度の感覚（新入社員・新入学の人々のバス停で待つ人々の様相〔服装〕）

ちるさくら海あをければ海へちる　高屋窓秋
季語（さくら）季節（春）
青とピンクの色彩の対比　さくらだって自分が映えるところへ誘われる　擬人法

萬緑の中や吾子の歯生え初むる　中村草田男
季語（萬緑）季節（夏）　切れ字＝や
生命力・成長〔強い生命力の中で我が子の成長を感じ取る〕　中間切れ
緑と白の対比　万緑の中でキラリと白く輝く歯のイメージ

山越える山のかたちの夏帽子　桂信子
季語（夏帽子）季節（夏）　体言止め
捉え方次第ではあるが、共感・共有の明るい楽しみ
困難・逆境を乗り越えんとする力強い句と捉えるものもある

いなびかり北よりすれば北を見る　橋本多佳子
季語（いなびかり）季節（秋）
稲妻・稲光と「稲」がつくことから「秋」の季語
黄金色の稲穂をいっそう輝かせた稲妻。その方角は北、不吉さに向き合う強い気持ち

金剛の露ひとつぶや石の上　川端茅舎
季語（露）季節（秋）　切れ字＝や　体言止め
・金剛＝ダイヤモンド　露といえばはかないものの代表であるが
朝日をうけて凜々しく輝く朝露の不滅の存在感　輝きのするどさ

冬菊のまとふはおのがひかりのみ　水原秋櫻子
季語（冬菊）季節（冬）
人であれば、コートやマフラー、化粧で補うところ
時節を過ぎた菊が、自分自身という素の存在のみで気高く堂々としている

星空は無音の瀑布鯨飛ぶ　神野紗希
季語（鯨）季節（冬）
・瀑布＝大規模な滝　天から降り注ぐ星々の光を無音の瀑布になぞり、その雄大さを鯨も飛ぶほどとした幻想的な句

咳をしても一人　尾崎放哉
季語（無し）季節（無し）
無季・自由律俳句　体言止め　孤独
咳をしても、その音だけが還ってくるひしひしとしたみにつまされるさみしさ

あをあをと空を残して蝶分れ　大野林火
季語（蝶）季節（春）
句のドラマ性＝蝶の動きを目で追ってところで二手に分かれた蝶　残ったのは
青々とした空。　感動の中心は、残された空の青さ

【自分の俳句を作ってみよう　創作】